



ぱねんと!
らしいん!

和泉亮

Illustration
いづみみなみ

二月十三日

藤原、女末糸工

『みなさん、おはようございます！ ついに明日はバレンタインデーですね。「準備がまだだった」という方、ご安心下さい。今日は練習しなくてもすぐ出来てしまう簡単なレシピをお伝えします』

朝から点けっぱなしにしてあるテレビから女性キャスターの明るい声が届く。

「おっ、きたきた」

画面の左上の数字は7と55を表示している。毎日この8時直前にやるコーナーが私は好きだ。主に学生向けに発信していて、これを見ている友人は多い。内容は学生でも手が出るものばかりというだけでなく、キャスターが可愛いよねという話になったりもするし、クラス内でもそこそこ流行っている。見なければ乗り遅れるとまでは言わないけれど、朝のこの番組で知った内容からその日一日の話題いちにちが始まることもあったりする程度には影響力があるみたいだ。

ま、私は流行うんぬんより純粋に内容が好きなんだけど。

このことを話すと「妹紅のイメージと違うよね」と言われることもあるのが悲しいところ。

どうせ私はさばさばしてて男らしいとかいわれてますよ。

それでも好きなものは好きで、自重するつもりはない。みんなの中のイメージを演じるなんてごめんだからね。

『まずは、このどこでも売っている板のチョコレートを用意します。次はなんと、このホットケーキミックスです』

相変わらずほわほわとした声だ。

「はあ……可愛いなあ、ほんと」

声質も容姿も自分とはまるで違う。自分の声は少しばかり低くてカラオケに行っても、その歌の一番高いキーが出なかつたりする。最近の曲は無闇に高いものが多いのでこれはかなり痛かつたりする。見た目もちよつと堀が深くてキリつとして思えるように思う。外国人みたいで恰好良いじゃないか、つて言われたこともあるけれど、そんなものだろうか。自分は色々な部分で女性らしさからは遠い気がして、ついつい女性らしいものに憧れを持つてしまう。

そんな可愛らしいキヤスターはテレビ用に特別な恰好でも許可されているのか、襟元に少しフリルのついたブラウスに花を思わせるようなふわりとしたキュロットスカートを合わせている。——もうちよつと慧音が大人っぽくなつたら似合いそうだな。

そんなことを考えていたらいつの間にか『では是非チャレンジしてみてくださいね！ また明日』という声が聞こえてきた。

しまった、と思ったときには遅く、映像はビルの遠景に次の番組のタイトルロゴが浮かんでいた。

ぼんやりと見ていたせいで内容がうる覚えだった。どうしよう。学校に行ったら誰かに訊こうか、と思ったところで8時ちょうどを告げる『おはようございます』の声。「つとと、やばい。そろそろ出ないと」

実は結構ぎりぎりの時間だったりする。急いで玄関に——向かわずに、勝手口から出る。

扉を開けた途端、目に入るのは鬱蒼とした深い竹林だった。

「今どきこんな竹林があるのなんてここくらいだよ」

思わず愚痴みたいな言葉が漏れる。もう何回くらい口にしたか分からないけれど、ついつい言ってしまう。

実はこの竹林は私有地だ。左右に視線を走らせても端が見えなくて、しかも横幅だけじゃなくずつと奥にも広がっている。数メートル進むだけですぐに薄暗くなってしまうほど広大な竹林は、信じがたいけれど個人の土地。

私の嫌いなあいつの家の敷地。飽きもせず愚痴をこぼしてしまうのは、その嫌いだという感情が小さい頃から刷り込まれているせいだろう。

あいつも——蓬莱山輝夜も私のことが嫌い。

だつたらなんでそんな竹林の前にいるかというところ、ここを通らなければ遅刻してしまうからだ。学校はこの竹林のずつと向こうに建っていて、もちろんここを通らなくても行けるには行けるんだけど、何せこんなにも広い竹林だ。迂回するだけでそれなりの時間がかかってしまう。時間がかかれば家を出る時間もそれだけ早めないといけない。

「それだとあのコーナーを見られないんだよなあ。まったく、ホントにこの竹林は邪魔だな」

そう。仕方がないんだ。あのコーナーを見るためにはここを通るしかない。必要な犠牲なん

だよ。

「なんて、バカなこと考えてないでさっさと行こう。ホントに遅刻する」

と、茶番は終わりにしてサクッと足を踏み入れる。もう勝手知ったる何とやら。小さい頃から何度も入っていたし、一日中入ったことだってあるんだ。持ち主は嫌いだしこの竹林は邪魔だけれど、竹林そのものに罪は無いんだよね。ついでに言うところ私所有地に足を踏み入れるのに、今更罪悪感も何も無い。いやあ、ここって夏場は涼しいんだよ。

「フフフフフーン、フーフーフフフーン♪」

大好きな歌を口ずさみながらどンドン進む。目を瞑ってたつてウチから反対側まで抜けることが出来る。

「よっと。今日も無事、竹林踏破〜っと」

「おはよう、妹紅」

「あ、慧音。おはよう」

竹林の出口で待っていたのは後輩の上白沢慧音だった。自転車を脇に止めて、手には文庫本を持ってるところからすると、ちよっと早めに着いてたみたいだ。本を読みながら時間を潰してたんだろう。

「今日はちよっと遅かったな」

「あれ、そうだった？ 慧音が早く来すぎたんじゃないの？」

「確かに早く来てしまったけど……ほら」

ずいっと綺麗な白い腕を見せてくる。じゃなくて、時計を見せてきた。

「本当だ。家出る時、ちよつと考え事してたからな」

「どんなこと？」

「この竹林邪魔だなーって」

「またそんなことを。蓬莱山先輩が聞いたら怒るんじゃないか？」

「今更こんなことで怒ったりなんかしないって」

「でも、この竹林を抜けられるおかげで妹紅はあの番組を最後まで見られるんだらう？」

「この竹林が無ければきつと道路が整備されてるよ。そしたら何の気兼ねもなく見られたはず

」

慧音の言うあの番組は、もちろん朝のあの番組。私と同じく彼女もあの番組が好きで見ているらしい。好きな特集の時は録画をしたりするほどだから、私より好きなんじゃないだらうか。もつとも、慧音は自転車通学で遠いから、普通に見ていたら私と同じくギリギリになるみたいだ。今日は早めに来ていたようだし見てこなかったのかな？

あんまり頭に入ってたから内容を聞きたかったんだけど……。もし今日の録画してないようだったら学校のやつにでも聞くか。

「はあ……ま、蓬莱山先輩と犬猿の仲なのは今に始まったことじゃないか」

「そうそう。そんなことより行こう。ちよつと急いだ方が良さそうだよ」

「本当だ……ごめん、長くなつてしまったみたい」

「いいつて。今日は私が漕ぐから。ホラ、後ろ」

先に慧音の自転車に跨がってから後ろをポンポン、と叩く。

「ありがとう、妹紅」

慧音がはにかみながら乗る。スカートが皺にならないよう押さえ、滑るように座る仕草を見て「ああ、そんなところが自分とは違うんだな」と思った。

すつと腕が伸びてきてお腹に回される。私の体温が高めなせいか、それとも冬場に外で待たせてしまったせいか、少しばかりひんやりとした慧音の腕。

「妹紅？」

「ん、ああ。ごめん。準備オツケー？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ、しつかり捕まつて。ちよつと飛ばすから」

「う、うん……」

まるでその言葉を待っていたかのように、言つたそばから腕に入る力が強くなった。

慧音の感触に意識が引かれそうになるのをぐつとこらえてペダルを回し出す。

ぐる。ぐる。と、力強く、のろまな回転は次第にくるくと早く軽快なものへ。あつという

間に加速して風の中を走ってゆく。

ふっと青臭い匂いが途切れた。

竹林が遠ざかっていくのが見なくても分かる。

代わりに感じるのは慧音の香り。大好きな慧音の甘い香り。

今日はこの香りに包まれている時間は短いのだなと思つた。少し遅れてしまつたから。急がなくてはならないから。

こうなつたのも、竹林に入る前に、あいつの顔を思い浮かべてしまつたからだ。

上白沢慧音。

ひとつ下の学年で、二年生。

趣味は読書で、歴史ものが好きらしい。たまにメガネをかけることもあつて、休み時間に文庫本を広げている姿は、文学少女然としている。

概ね間違つてはいないが、その字面がイメージさせるほど大人しいわけではない。

物腰は丁寧ではある。ただ、少し変わつていて口調がどこか男っぽい。

私とは違つた男っぽいところでも言えはいいのだろうか。私の口調が雑なのに対して、慧音のは固いとも言ふべきか。歴史好きだからなのだろうか、と思つたりもした。

少しだけ変わった後輩。

そして私の一番仲の良い友人。

あまり人付き合いが得意でない私に懐いてくれている。有り難いし、一緒にいて楽しいのは間違いないけれど、「どうして私なんだろう?」と思う時もある。

何が彼女の琴線きんせんに触れたのか。大それたことはしていないはずなのだけれど。

でも、友人というのはそういうものなのかもしれない。切っ掛けが明確なわけでもなく、いつの間にか一緒にいて、その時間が心地いい。それだけあれば充分なんじゃないか。

これからずっとこうやって今が続いていけばいい――。

「妹紅」

「……………」

慧音の声で現実に戻された。

「楽しみにしててね」

「何が?」

「あ、聞いてなかったな」

「あ……………えーっと。ごめん。なんかぼうつとしてた」

とつきにそう答えていたけれど、まあ、考え事というほど何か目的があったわけじゃないし、間違っではないよね。

「寝不足？」

「そんなことないと思うけど」

「そっか」

さして気にした様子もないけれど、さすがにこのまま流すのも悪い。

「慧音、さつき何て言ったの？」

「ん？ ああ、バレンタインは期待しといてねって」

「もう明日じゃない」

「明日だな。ちゃんと手作り渡すから楽しみにしててね」

ふふーっと、言った慧音こそが楽しみにしているかのようだった。

放課後に材料を買う。お菓子の種類は何がいいか。材料は何が必要だろう。と、表情を見なくとも慧音の意気込みが伝わってくる。

「ねえ、慧音」

「なに？」

「嬉しいけど、無理しなくていいよ。試験終わったばかりだろ」

寝不足か、と訊いてきたけれど、多分慧音の方がここ最近の睡眠時間は少ないと思う。

かなり根を詰めて学年末の勉強をしていたみたいだったし。そのうえチョコを作るのに頑張らせるのもなんだか気が引けてしまう。

「いいんだ。私がやりたくてやるんだから」

「まあ止めはしないけど……」

「明日は妹紅の驚く顔が見られると思うと今から楽しみだよ」

「ははは、じゃあ適度に期待しておくよ」

チヨコの交換を約束し、ついでにそのまま明日は一緒に遊ぼうと決めた。

心地よい慧音の鼻歌を聞きながら、少しでも溜ぐスピードを上げた。

冬の空を抜ける風は普通であれば冷たいだけなのに、今はその冷たさも季節を感じる事が出来て気持ちよかった。楽しみが増えるだけで、日常はこんなにも変わる。